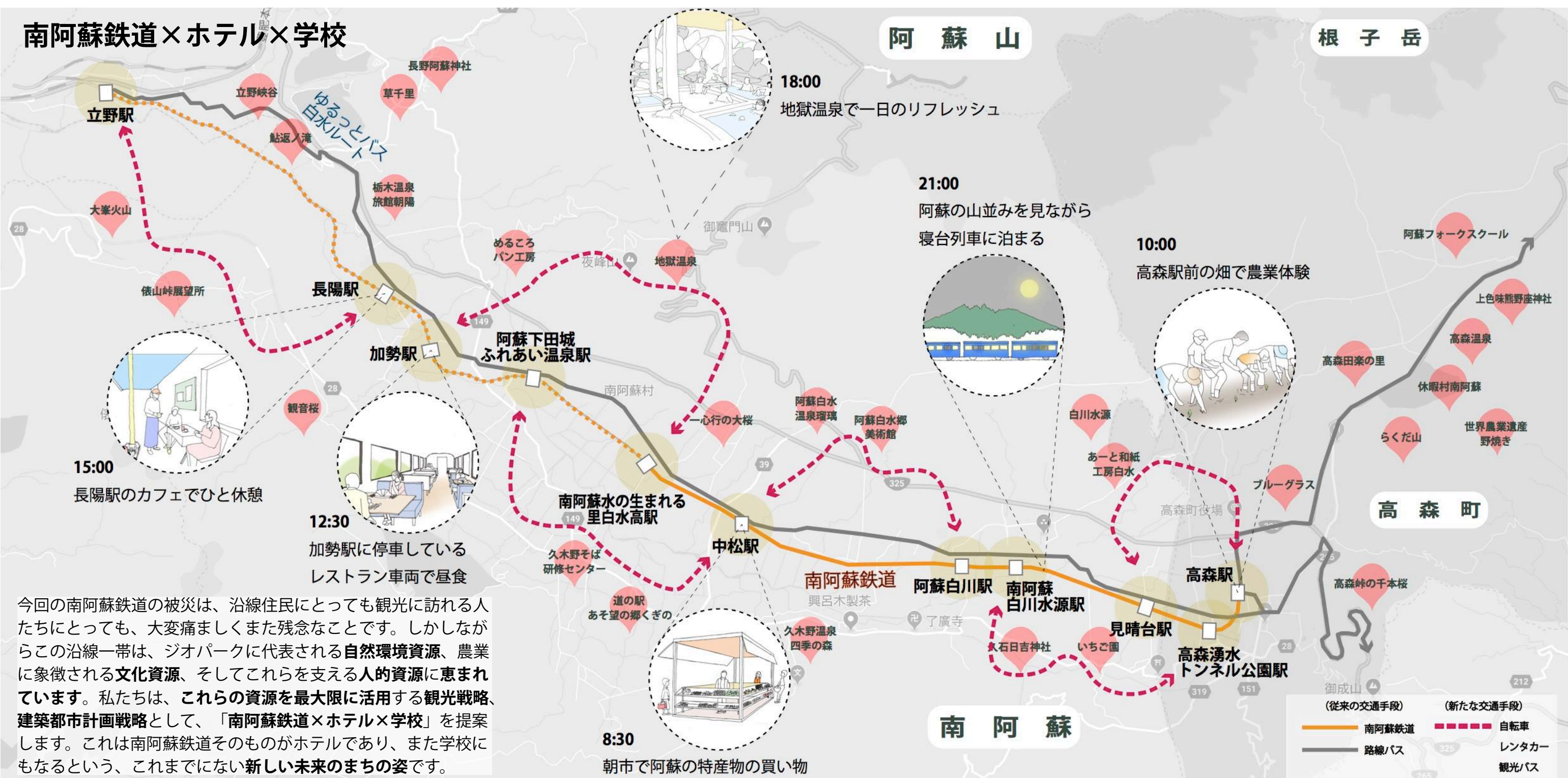


南阿蘇鉄道×ホテル×学校



今回の南阿蘇鉄道の被災は、沿線住民にとっても観光に訪れる人たちにとっても、大変痛ましくまた残念なことです。しかしながらこの沿線一帯は、ジオパークに代表される**自然環境資源**、農業に象徴される**文化資源**、そしてこれらを支える**人的資源**に恵まれています。私たちは、これらの資源を最大限に活用する**観光戦略**、**建築都市計画戦略**として、「南阿蘇鉄道×ホテル×学校」を提案します。これは南阿蘇鉄道そのものがホテルであり、また学校にもなるという、これまでにない**新しい未来のまちの姿**です。

■南阿蘇鉄道ホテル

南阿蘇鉄道沿線の各駅には、**駅ごとの個性的な展開の芽**が潜在しています。その個別の魅力を少しだけ増幅させ、一つの駅がレセプションやダイニング、ライブラリーや温浴施設などホテルの各機能を担う、**全長17キロに及ぶ新しいホテル**を提案します。すでに多くの観光客を魅了しているトロッコ列車を核として、**鉄道が移動手段**であり、同時に**客室**にもなるという計画です。朝起きて朝食をとり、また入浴して寛ぐというごく当たり前の滞在を、**鉄道沿線の雄大な景色や地域の魅力**とともに味わうことのできる**全く新しい体験**です。この南阿蘇鉄道ホテルは、一部がまだ不通となっている現状でも始めることができ、**復興のプロセスも視野に入れた計画**です。

■南阿蘇鉄道学校

周辺地域に広がる**農業**は、産業として成熟しているのはもちろんですが、すでに始まっている**農業塾**など、**教育の場**として、また**観光の場**としても、**大きなポテンシャルを秘めています**。そのための場を南阿蘇鉄道沿線に、時に建築として、時に鉄道を整備することで、**南阿蘇鉄道そのものが新しい「学校」として生まれ変わる**計画です。農業に携わる人にとっては新しい仕事の間であり、また観光客にとっては新しいまちへの玄関口にもなる、その**有機的な関係**が、これまでにない新しい場所と人との出会い、人と人のつながりを生み、**将来的には新たな産業の創出や定住化を促すこと**にもつながることになるでしょう。

■スローモビリティ

南阿蘇鉄道をホテルとしてまた学校として機能させるため、私たちは既存の電車やバスに加え、単なる移動手段ではなく**少しずつ場所を変えながら各々の地域の魅力を体験**したり、**逆に活性化**したりするような**スローモビリティの導入**を提案します。町中をめぐり**屋台**、さらには南阿蘇鉄道上を走る**多彩なモビリティ**を導入し、特定の場所にとどまらず沿線の**様々な資源と連携**しながら**町全体を生まれ変わらせます**。屋台は食堂や市場、時には教室として**町中をめぐったり**、駅に集結させたりすることで、**ホテルや学校の機能の一部を担う**こととなります。鉄道上には寝台車や食堂車などを停車させ、**ホテルや学校機能の一部を担える**ようにします。現在不通となっている線路上にもこうした車輛を暫定導入したり、復旧工事の進捗に合わせて自在に伸縮するなど、**長い期間を要する復興の様々なフェーズ**において、**臨機応変**に対応できます。このように、地域の様々な活動や新たな観光が**過剰な設備投資をすることなく**展開していきます。



■観光・産業・教育の屋台とやぐら
高森駅周辺にも、南阿蘇鉄道のもつ大きなスケールとは異なる小さなスケールで、魅力的な資源が眠っています。その資源を、町民の日常生活を支える地域拠点として、また観光拠点として生かしていくために、移動可能な「屋台」と地場産材で作る小さな木造建築の「やぐら」を提案します。これらを季節に応じ、曜日に応じて町の中をめぐらせ、今後起こりうる様々な活動の場にしていきます。

■まちを活性化する屋台
移動可能な屋台は、町のスローモビリティとしてフレキシブルに活躍します。キッチンやマーケットとして風鎮際などのイベント時に登場するだけでなく、農家の方が直接農産物売る市場になったり、山村酒造の試飲コーナーになったり、すでにある農業・産業の魅力を相乗的に高めることにもつながります。また、教室となる屋台を置くことで、町中のあらゆる場所が即席の学校になります。豊かな農地や牧地、湧水、みそ醤油蔵などの資源を小中高校の教材として活かすことで、地域に根ざした高森ならではの教育が展開します。その他、移動図書館や子供向けのお話会の場として、さまざまな世代間の交流の場としても機能します。



屋台教室



屋台ホテル



屋台キッチン

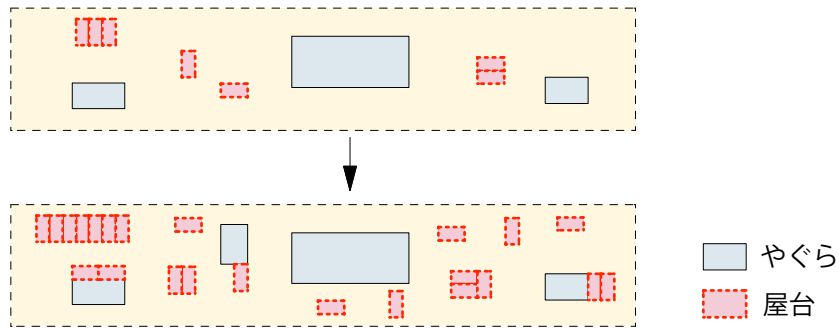


屋台マーケット

■多様な活動を支えるやぐら
木造建築でつくるやぐらは、観光や交流の要所となっている場所に設置します。例えば観光交流センターの芝生広場へ目印となる物見やぐらを設置するなど、観光客が地図に頼らず町を散策しながら観光スポットをめぐることができるようにします。今後の交通網の整備によってバス停などが設置される場合も、同様のやぐらで設えることで観光サインの役割も果たします。また、一部増床して商店の店先を広げるなど、町民と観光客の交流を促すきっかけにもなります。

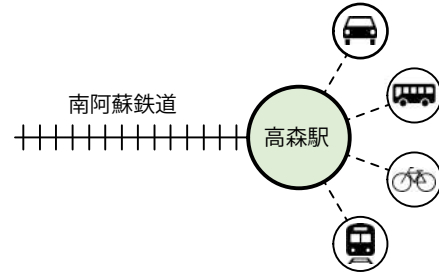
■まちとともに成長する駅舎

新しい高森駅舎は観光客を迎え入れる玄関口であると同時に、町で繰り広げられる様々な活動・交流・交通のプラットフォームとしても重要な役割を担います。私たちは多様なアクティビティを包むように大屋根をかけ、その下に自由に展開可能な木造のやぐらを組み合わせた、おおらかで生き生きとした駅舎を提案します。この構成により、駅舎としての存在感と、町の発展に柔軟に追従していくフレキシブルさを併せ持った駅舎となります。また、駅舎は町の各所に展開する屋台の拠点にもなり、駅のにぎわいが町へも染み出します。今後町の発展とともにこの駅舎が成長していくことで、町民からも永く愛される存在になっていくでしょう。



■交通の結節点としての高森駅

電車やバスをはじめ、タクシー、自家用車、レンタサイクルなど、様々な交通手段がシームレスにつながる誰にとっても使いやすい駅舎とします。駅前広場には十分な車寄せ、大型バスやタクシーの待機場所、自家用車等の駐車場、レンタサイクルやシェアリングカーのスペースなど、交通のためのスペースを十分確保することで、機能的な交通の結節点となります。バスは原則ワンウェイとし、歩行者と極力交差しないような動線計画とします。また地上階のやぐらは移設・改築が可能のため、将来の交通スペース拡張や、新たな交通手段の導入も容易な計画です。

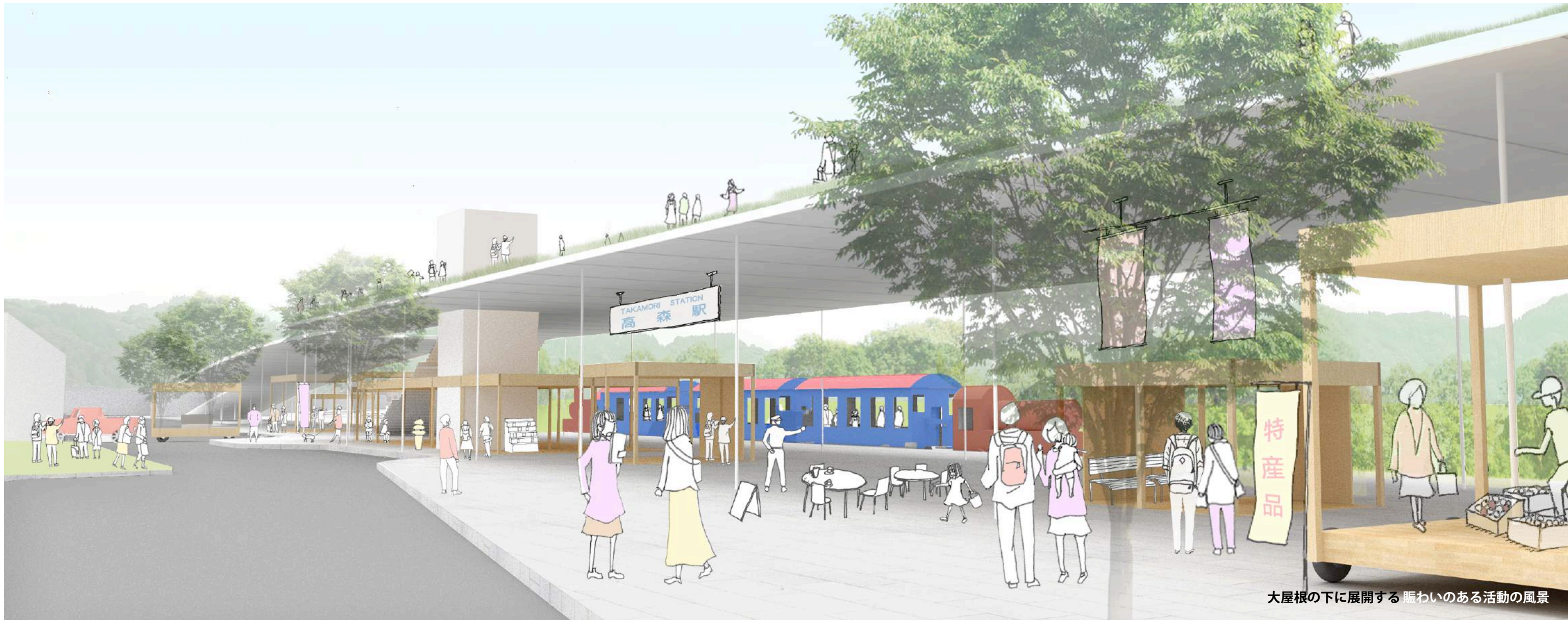
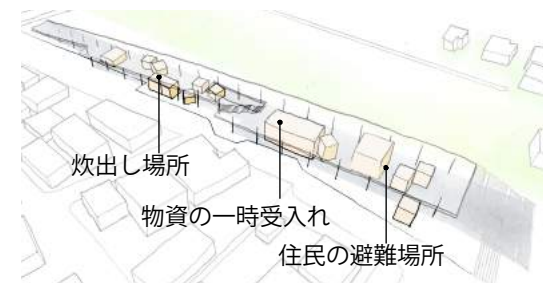


■にぎわい広場とくつろぎ広場

駅全体を町民に開かれた公園ととらえ、軒下と屋上に異なる2つの広場を整備します。大小さまざまなやぐらが展開する大屋根の軒下空間は、常に活気に溢れたにぎわい広場です。雨風をしのげる半屋外空間は町のあらゆるイベントの舞台となります。対照的に大屋根の上は、高森の町並みや阿蘇の雄大な山並みの風景を見渡せる、のびのびとしたくつろぎの広場です。子供が安心して安全に過ごせる遊び場でもあり、祭りやイベントの様子を一望できる観客席にもなります。いつも何かに出会う期待感を感じられたり、町のにぎわいや様子を感じながら美しい風景を眺めたり、訪れる人に様々な居場所を提供します。

■防災拠点としての広場

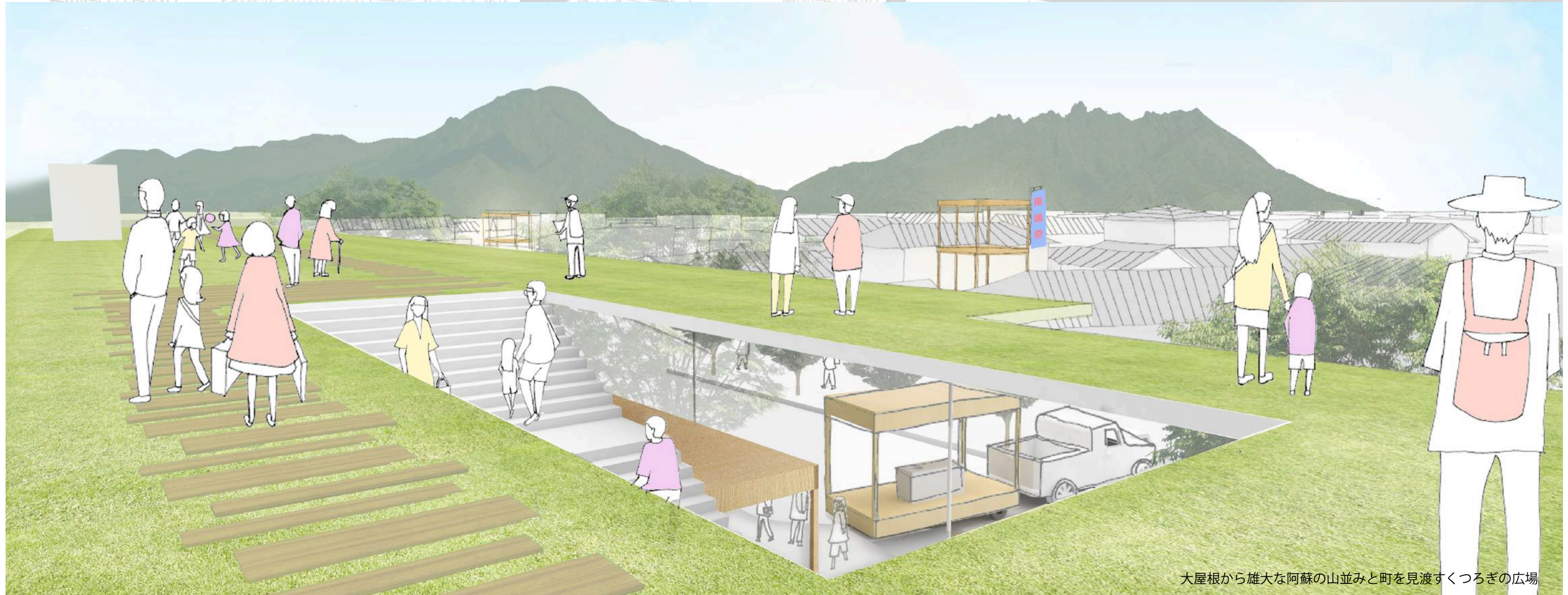
この大屋根は火山の噴火や地震などにも強い恒久的な構造で作り、防災拠点としてさまざまな役割を柔軟に受け入れます。大きな軒下空間は、単に人々の安全を守るだけでなく、物資の一時受入場所や臨時の避難所、炊き出しなどに活躍します。また屋上からは町を見渡すことができ、町の様子が随時覗えます。



大屋根の下に展開する賑わいのある活動の風景



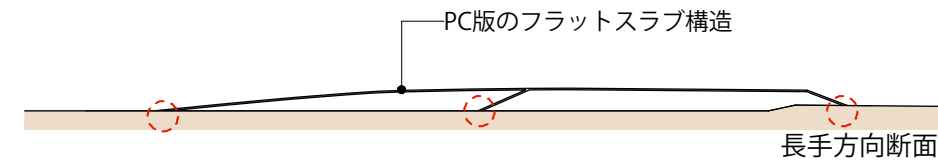
駅での活動の様子がまちに染み出していく



大屋根から雄大な阿蘇の山並みと町を見渡すくつろぎの広場

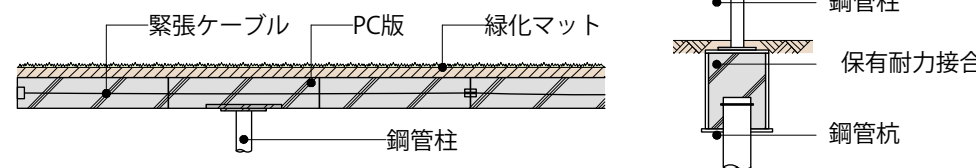
■安全で合理的な構造計画

大屋根は、鉄骨柱とPC版によるフラットスラブ構造とし、大屋根の端部を地盤面に接地させることで地震力を直接地盤に伝達します。工場で製作したPC版を現場でつなぎテンションをかけるため、安定した品質の確保が可能で、工期が短く抑えられ、経費削減や工事期間が与える観光への影響を最小限にすることができます。また、防災拠点としてII類の性能を想定すると同時に、鉄道の障害とならないよう地震力は建築基準法の1.25倍で検討します。



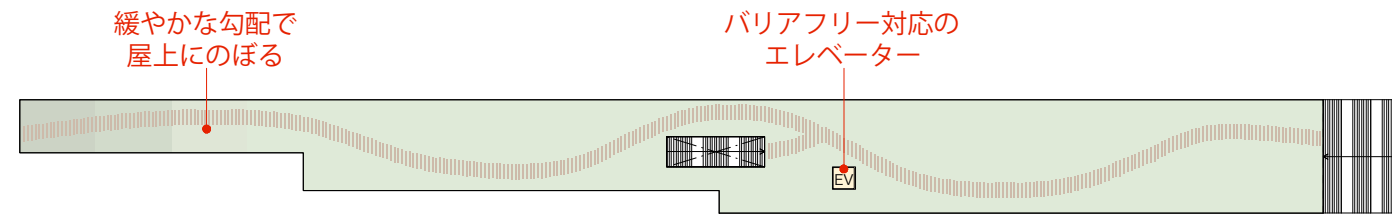
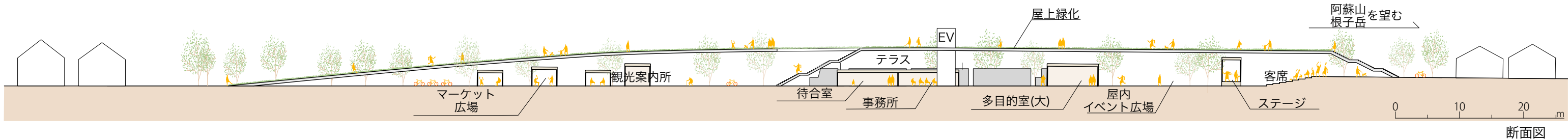
■地中梁をつくらない

杭と柱は保有耐力接合とし、地中梁を無くした計画とします。計画の自由度が向上するだけでなく、掘削量が抑えられ経済的でもあります。地中梁を設けないことで、設備等の更新や追加、将来の増築にも柔軟に対応することができます。基礎は鋼管杭を想定しています。



■LCCに配慮した持続可能な建築

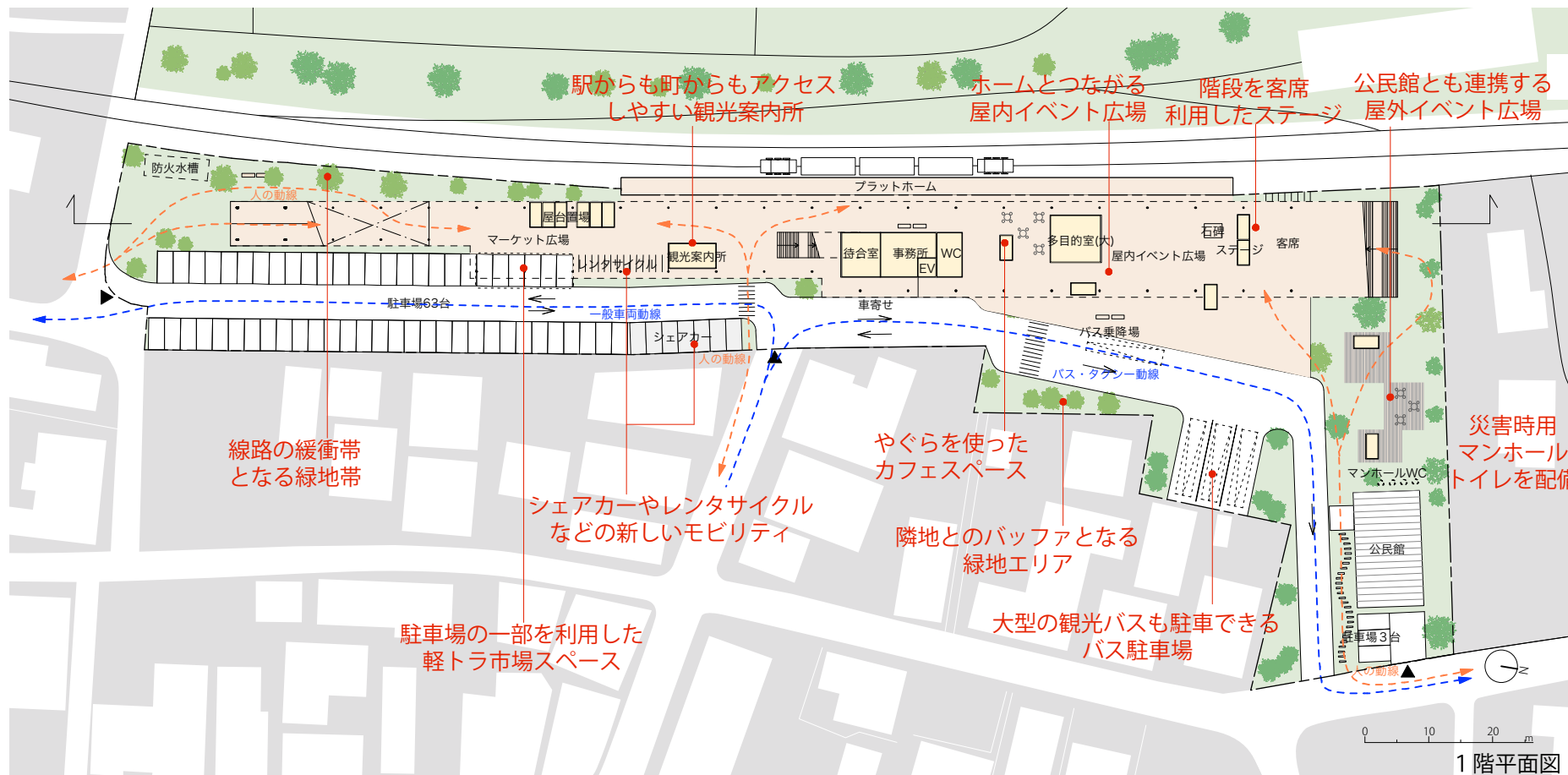
南阿蘇地域の気候風土を最大限活かしてパッシブデザインを重視した環境計画とし、省エネルギー化を図ります。大屋根は、緑化することで輻射熱を低減し、夏でも快適な軒下空間を生み出します。室内化されたやぐらは、小さな気積の集積で構成するため、空調エネルギーを最小限に抑えられます。大屋根の架構はプレストレスを採用することでひび割れに強く耐久性が向上し、また火山灰の影響を考慮したコンクリートとすることで建物の長寿命化が図れます。その他、雨水や再生水利用、地熱利用などライフサイクルコストを鑑みながら柔軟に検討します。



屋上平面図

■町民とつくる高森駅舎

町民の意見をどれだけ丁寧に計画へ取り込めるかによって、町や駅舎への愛着が変わります。私たちはグランドデザインの進捗に応じて、段階的に意見交換の場を設けていきたいと考えます。まず、地域住民とのワークショップを行う前に、農業組合や商工会、鉄道会社、観光、ホテル事業者など、複数の団体へそれぞれ十分なリサーチを行います。可能性のある観光資源や防災、定住化へのさまざまなヒントを集積し、その上で地域住民と駅舎のワークショップを開催します。計画中は高森町内にグランドデザイン室を設置し、町と常に接続した環境のもとで計画を練ります。ICT化されている地域だからこそできるリアルタイムな情報共有を試み、計画案を随時アップデートしていきます。また家具や屋台の検討フェーズでは、意見交換や情報共有のみならず、実際にものづくりに触れてもらうワークショップの企画を行うなど、地域交流や子供たちの教育の一貫として、観光資源としても、このプロジェクトが役割を担うことを期待しています。



1階平面図

